

# 教育政策を巡るEMPM

---

千葉大学 貞広 齋子



# 本日の構成

---

0. 自己紹介
1. エビデンス活用のタイミング
2. データ収集とエビデンス流通のフレームワーク
3. エビデンス支援組織の重要性
4. 教育政策で許容・尊重したいこと

# 1. エビデンス活用のタイミング

---

## ●事前

### ・ システマティックレビュー\*に支援されたエビデンス

「信頼度高・リソース最小・効果最大」～「信頼度低・リソース最大・効果最小」のスペクトル。信頼度の低いエビデンスに頼ることはデメリットが小さくない。

## ●事後

### ・ 設定指標による評価

無理矢理あてた設定指標・代替指標は、本質から目をそらす内外へのアリバイになる。

## ●試行錯誤プロセス

### ・ 設定指標による評価とシステマティックレビューに照らした再設定

試行錯誤を許容しないEBPMはデメリットが小さくない。

\*研究論文を系統的に検索・収集し、一定の基準で選択・評価し、効果の大きさや結果の信頼性を示したもの

## 2. データ収集とエビデンス流通のフレームワーク

---

### ●データ収集の条件整備とフレームワーク

- ・データ収集の条件整備とフレームワークが重要。現在は、これを欠く状況。

### ●データ・ファクト・エビデンスの違い

- ・データだけでは機能しない。データ→ファクト→エビデンス（因果関係の解明）の導出が必要。
- ・良質なデータがあってこそ、導出されたエビデンスを、政策規範（例：ウェルビーイングの実現、社会的公正の実現、等）に照らして、解釈したり、翻訳したりすることが可能になる。

### ●システマティックレビューに向けて

- ・我が国においては、システマティックレビューに耐えるだけの研究知の不足も。

## 3. エビデンス支援組織の重要性 (1/2)

---

### ●生半可なEBPM

- ・ 誤読、つまみ食い、伝言ゲームの失敗の温床にも

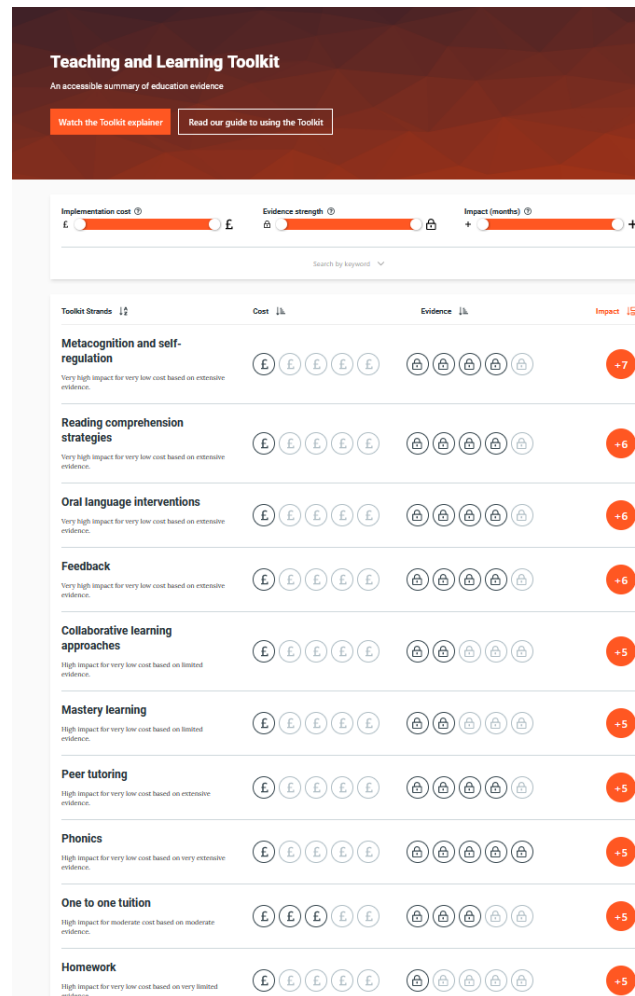
### ●エビデンス収集・翻訳・支援組織/それを担う人材育成・採用

- ・ 餅は餅屋。政策立案者は、政策立案の専門家であるが、エビデンスの吟味・翻訳の専門家ではない。専門家がエビデンスの吟味・翻訳を担った上で、翻訳者と政策立案者の対話を実現する。

### ●例：英国における学校教育計画支援組織（Education Endowment Foundation：教育基金財団。以下、EEF）

- ・ システマティックレビューと、同知見に基づくツールキットの公開（ここまで本気でないと、コストに見合う成果に黄色信号？）
- ・ 但し、近年では、現場の暗黙知の見直しも。

## 3. エビデンス支援組織の重要性 (2/2)



- <https://educationendowmentfoundation.org.uk/education-evidence/teaching-learning-toolkit>

## 4. 教育政策で許容・尊重したいこと

---

### ●失敗・撤退・やり直し（試行錯誤）の許容

- ・ エビデンス活用のタイミングは、新規政策導入時だけでない。失敗を許容しなければ、新基軸は切り開かれない。

### ●エビデンスにならないものの許容

- ・ 定量的に切り取れるものと、いかんともし難いものがある。コンプライートに固執しない。

### ●最前線の専門家の暗黙知・経験知の尊重（定量的可視化を進めることも含む）

- ・ 教育政策において、専門家（教職員）の暗黙知の価値剥奪が、効力感や専門的アイデンティティにマイナスに働き、教育の質低下をもたらす得る可能性。これを低く見積もらない。